



夢油郎

子

^ 13
3243
4 上



平松町
本惣
誦訪多

賣油師卷之五



五田

ある日長松下の仲居霜といへる奴のつりお供にて

津ま路が頼房よまるとり代よまるとりたかひ。頼羽の家

人ときえし一い彼地うらむらとやとぬぬるふたふあ

らすとよよいよ〜あや〜と頼よ彼とよせけまは

まはふるひす笑ひととばす〜もかよ余を備が飯の

候とあるあへする。とともも松下と合衆の老と候よく

いま〜とまにまがたやとくあつすばまやうもあらすそ

浪花

芝屋の史

藤原

十

のまゝ、喉乾きてかへり、さう東来さう、さう吾妻路な
まの、かの島、さう一点の島、さう果て果て、さうけりたが、さうと、さうと
と、さうかくまでふ、さうく、さう秘、さうと、さうふ、さうかな、さうら、さうず、さう子、さう能、さうあ、さうら、さうん
いて、さう虚、さう美、さうと、さうと、さうくら、さうんと、さうお、さうり、さうん、さう時、さうも、さう秋、さうの、さうと、さうし、さうめ、さう七、さう夕、さうの
約、さう未、さうよ、さうて、さう長、さう松、さう下、さうふ、さういた、さうる、さう。客、さう人、さうい、さうま、さうご、さう未、さうら、さうさ、さうる、さうい、さうと、さうま
あ、さうま、さうば、さう小、さう之、さう板、さうと、さうや、さうて、さうお、さう成、さう呼、さう也、さうお、さうる、さう異、さうと、さうお、さうさ、さうれ、
ば、さう着、さうあ、さうひ、さうと、さうつ、さう所、さうを、さうと、さうふ、さうが、さうて、さうか、さういた、さうて、さう猫、さう金、さうか、さうさ、さうさ、さうる、
糸、さうの、さう盆、さうに、さうの、さうで、さうお、さう未、さうる、さう成、さう吾、さう妻、さう路、さうの、さう二、さう口、さうど、さうり、さうの、さうこ、さうて、
か、さうど、さうり、さうお、さうく、さうら、さうと、さうび、さう小、さう之、さう板、さうお、さう持、さうせ、さうた、さうる、さう高、さうげ、さうと、さうお、さうり、さうて、
お、さうお、さうあ、さうら、さうへ、さうと、さうび、さうと、さうい、さうた、さうき、さうて、さうお、さう大、さう場、さうよ、さう出、さうて、さうい、さうら、さう死

る、さうよ、さう歩、さう金、さう十、さうと、さう糸、さうあ、さうり、さうと、さうび、さうお、さうい、さう大、さうひ、さうと、さう擔、さう代、さう備、さうし、
と、さうつ、さうり、さう一、さう盤、さうの、さう葛、さうあ、さうお、さうか、さうり、さうる、さう礼、さうと、さうな、さうた、さうま、さうふ、さうい、さうま、さうと、さうに
お、さう名、さうの、さう個、さう糸、さうさ、さうと、さうお、さうり、さうい、さう化、さうお、さうも、さう吹、さう扇、さうな、さうり、さうと、さうば、さうす、さう人、さうお、
か、さうま、さうが、さう糸、さう蓋、さう成、さう稱、さうし、さうて、さう新、さう所、さうの、さう夕、さう芳、さう吾、さう京、さうの、さうさ、さう尾、さうも、さうと、さうの
か、さうい、さうと、さう蓋、さうく、さうその、さう名、さうも、さうく、さうと、さうへ、さうい、さうつ、さうと、さうの、さう青、さう橋、さうお、さうれ、さうて、さうも、さう我、
一、さうと、さう搦、さう婦、さうと、さうし、さうり、さうて、さう恩、さう賞、さうお、さうあ、さうつ、さうら、さうん、さうと、さうお、さうら、さうを、さうい、さうり、さうう、さう又、さうの
日、さう吾、さう妻、さう路、さういた、さうけ、さうき、さうつ、さうて、さう一、さう日、さう二、さう日、さうう、さうち、さう所、さうて、さうあ、さうら、さうう、さうし、
長、さう松、さう下、さうへ、さう小、さう三、さう板、さうと、さうや、さうて、さうお、さう女、さうお、さう世、さう託、さうた、さうさ、さうあ、さうと、さう乃
あ、さうる、さうま、さうば、さう遠、さうる、さうふ、さう一、さう寸、さう髭、さう房、さうま、さうて、さう未、さうた、さうべ、さうと、さうい、さうひ、さうか、さうら、さうう、さうれ
お、さう供、さうと、さう共、さうよ、さうく、さうも、さう未、さうる、さうわ、さうづ、さうま、さうぢ、さうい、さう何、さうな、さうつ、さうら、さうい、さうげ、さうし

孔と述て、素よ素子よと素をし。さていひらりやりは、
 けころいいたづまよて新ゆを意うりし。けふいらとん地
 よくて髪をうせんとねりいぬるに、おあしく松島もい
 つまふておふし。他の人たのしたまは、揃あしくてはよ
 からず。近以素のどくなるううしごとるまども。そし
 ふけいごよ妙なまび。芳気まげてたまはまか。とたのめ
 成中て。お名のお何るまども。我ち揃ここのはたさしとい
 へるふ。あづま路おしらひて、さな卑下たしまたまひを我
 ちの年紀の路客人が居けけの境りう。その手際と
 とべまひ。いたまうまたのしたしとあらと。強も穢過す

さあらぶふけかまぐう。うけづうましまいらせんと
 さすまひました。小之枝の整望いさうし。も。揃運種柴持
 出て。花魁かあまをまは。権霜の後はまなぐ。髪うらあ
 る女同士号合ははあ人ふ一の癖のし。さしこと。花房の
 仇はや。浮世をねりのききいも。いたつとあなる花魁ま
 舞成あせんたなるまばと。整望さん玉強の。一ももやま
 けしと。お屋せらまてまぎき。しげのの。髪を意うてたど
 たし。くい。けらへど。き。湯の洞子合せりも。扇は
 かぶる松。系。あうせて唱。さへ
 礼まし。髪ととさうし。いと。たとこのおまとして

おもひぬ人よ聖文のとりもあたらばとせんとひ
くもふまびけ悪らとや。こーいあまへまへか
まがとちどりれとどらたてふづくーの九十九
と侃えるとやとりて。吾妻路のいといー男のたれおと
おもひぬ人よ聖文とかく。流きーきお君の父となつて。
花の御柳の大路よ年月成さるも。若世の戒行つとさく
一奴のいど成まげて千人の抱となしつ。守忠の誓成
まらさせて。夕よ老と送り朝よ美さじつへこよふ人慕
若人の涙ふあまともふもまざ。まよふまきふも笑を献て
まげの情のまらのく。う人の細布抱あつて。たてなぐふも

折ゆへさ恋の涙本臥手ふまきり

二世も三世もかけてむとんで。かろを髪よかよ
あづり成泣けてもけ。たれ志んくの志んくのこころも
くまふ茶釜釜

あつらもまろに。おひつち。若の涙とめ。若ふとハで。私
犯る女房蓮の。身のまゆもさの。あらぬ火の。籠糸のひとに
とそとまて。まうほいどえの雪ふうき。紙路の人の。若とま
未の招山まことと。まうーこころも。花雪川の。御
かいら人ころ。世成。後ぬまの。後。さう入あささ。あつら
らど。



たとい肩へとけがみの。ひつこきかその憎等るくと
撥折りのあにせつと。ふりいあふたる。尺木の又の
世やでもかけもとゆひ。かろくぬ色ひなりかり

と留えりて急のやと一さふ。ふねの余念さくすいて
おもはずもよも持たる。水油の執成あやまちてより
たんとませしと。あはやと留めしうど。花魁が浴衣の肩
ふりまたる。一帯の油ハ。ころがうちたむつとひらぐとど
か。相いふどろと。あやまちと。浴衣に。吾妻路ハ返して
のどくふたりひは。浴衣を授へて。いやう。若右して
汗小深たるものなぐ。行きの後着てたまはと。結

麻子の皺草帯。瓜と。をへて。あたい。うと。おへる。又のい。意
ま。こま。あ。ん。さ。の。も。あ。ま。と。て。眼。も。さ。く。よ。り。こ。い。裁。衣。
押敷けば。花魁。い。よ。ま。く。は。ひ。ま。し。と。乳。成。る。す。小。こ。板
野。ハ。心。作。て。塗。匠。盤。ハ。湯。成。汲。い。ま。洗。粉。を。添。て。手。成
こ。が。せ。ろ。お。う。の。浴。衣。小。深。た。る。あ。は。の。次。才。く。小。弘
か。ま。ろ。と。ま。て。吾。妻。路。ハ。や。う。け。成。の。ひ。ろ。う。ま。ご。と。く。あ
か。と。意。想。な。せ。る。賣。油。舟。の。風。夢。麻。中。小。佐。う。い。お。ご。ろ
人。と。て。も。あ。ら。ぬ。と。の。み。そ。ま。ち。へ。あ。か。と。對。して。隠。成。れ
あ。た。し。か。み。ご。し。も。化。し。成。と。ね。が。こ。ま。と。若。才。え。と。せ。た
ま。い。ま。よ。あ。の。日。給。羽。の。名。鳥。と。あ。ま。し。ハ。御。い。ま。ふ。し。て

賣油良 卷之五

名街氏佐佃をせら。賣油郎ならんといへば。おのゝ花魁まの
 ひねども同世たまひしるながら。美し松羽の名馬小遣り
 事付らざと。かたくは、ゆると。侍迎小守。居る勢。時さう
 しくもいやく。あ日花魁まの酔ままさままで。序との
 容然。こまやういそえたま。いずとも。幫回家の末。うら
 かの裕羽の名馬とすえし。御方某。い山崎の任人。油坊の某
 とおのたまひし事成。さらいのらね。すうりさうりとい
 ぶ。おまも今い。係し。おとく。かく白比よ。知らせたまへるうへ
 何と。けし。ゆらん。い。い。ふも其事。おたが。い。ト。し。う。な。つ。く。ん
 あら。ば。お。お。の。合。お。よ。て。を。と。同。を。う。小。何。の。へ。か。く。ま。で。ふ。り。く

け。ま。た。ま。し。そ。といへる時。又。お。い。わ。う。り。お。え。て。声。と。ひ。を。お。し
 け。賣。油。郎。の。る。ふ。つ。と。て。一。束。の。佐。あ。う。と。ま。ど。と。こ。と。の。の。の。わ
 まで。秘をま。今。出。名。の。お。よ。余。義。さ。け。ま。い。徹。細。又。行。至
 中。べし。か。ま。い。余。を。衛。と。守。て。山。崎。小。住。る。油。賣。人。う。一。日
 買。極。さ。る。お。指。お。て。来。至。花。魁。ま。と。ま。ね。きた。し。と。ら。ふ。余。お
 とも。風。奴。と。お。ひ。ひ。て。お。ぶ。り。もの。と。せし。成。東。屋。国。房。へ。い
 い。ま。極。中。氏。同。乳。し。り。と。い。ど。い。ら。来。獲。望。小。て。鏡。相。さ。り。て
 う。り。一。束。糸。の。事。若。氏。は。ま。て。歌。独。東。通。成。高。へ。た。る。首。尾。と
 守。て。保。と。感。し。う。け。ぢ。ひ。ぬ。ま。ど。恒。し。廓。中。小。住。来。し。て
 油。賣。ひ。さ。く。人。氏。客。と。せ。ば。家。の。名。と。と。二。つ。ふ。い。出。名。も。お。を。ら

くハ雲雨風のうら一強ハぬかへ。縁羽の台鼎なりと嘆歴せしハ
 金く赤屋の仁んさう。去ふより合ふ成禁じ。化小らさば
 かさらざいとまと出をべしと嚴重なるおほせよおをまてたま
 志もけりや成極せり。あまかしの我かうりよ。人おしらしや
 ねどりよ。是正小天余を御謀と空さうせざはわよ雲母が
 口とかて。事の始末ハ明白小若たす人ならん

〇十三回 伝き世ぬもの

常下花魁が中割がどくほうびざごとく。頻ふ懊悔して
 吐息とつと。まこと身の上と顔もまばかしく頼成とさう采るも
 天母見身のたらしふしあまは。若若しといふも、ねども。然るも

ハ美カ雨祝ふハ嬰孩してあままいらせしこと。あつハいさし
 りのふしとさまへねば。都てのこといねども。若育ありし後
 の親ハ平とさるとの教の通りの本よ書こりし紙讀たは
 ことふかきしとこハ人肉經紀ハ拐掣、只一日の考もま。預はし
 ごとく青信よ。せめて恩義を送らんといふも。義父の行
 儀しませず。まこと子かふもあまよ。言約定の夫ありとまは
 あだし人小身と釋とが。女の房のまとるゆへ。初め浪花の抄所
 にて。花の戸と咲し。離枝のほと出の日の客人も。同序ハ
 踏どるハ表ハ花漸を年代とてせ。公裏ハ夫への標よてる整
 のことかへねども。松の位と遜とせらると。若女希とねるべし候。

多しと買と守らへん死費の資も。信の僕のひま
 らせたり。行とど首尾よく計りたまはせよ。余義なく新
 吾妻路の行くところ。成推量おぼも作に種ぬまて
 知らぬ涼雨の二むらさきごとく形。赤路より形を
 我々の家法に余往後成りたまはせ。主家の首尾や
 かまさん。こくぬらせたまひて。赤小も南ふもと左
 名たまはせよと。花魁が付成成りて。赤い赤おへま
 赤より吾妻路の赤があらせのそまの成。田面いよ八
 の目ふもいつらうするまはせ。赤ませいと披露し。いつ小
 務まで目どましく疑はれ。小三板一げの小おせ文彦の

裏小い。おりのたけ成こまくとおこり。玉赤のりや
 意中おて。かの賣油郎成りけり。雁經成通てとど
 中箱を付し本まよといひ食り。お通をせし揚
 屋所の方へ志づやうあ回し。賣油郎と見届さ。さ
 時別やまころろんと。あ青樓に入はまら。小三板二個を
 出におき。今や赤まらりと待せども。目の着るおらう
 までも赤たらとど。いりあらうやらんと。ふまはらうと
 赤三板はこふいつも。單日にいさなまて。今日さん
 赤ませる目なるふ。明日こそ赤らまつらうとて。其日か
 却後波のこころなる。沖坊赤た赤門の老衰して。兩眼明ら

賣油郎
 八
 三
 三

ねらざるうへに経余を誘ひ文退きて後深婦深海女に偷
 漢傳助と計りて合家の貫本ひつゝ及ばず。お生大お草抄に
 いたるまで。お一と採りぬ。ととや尊ひそせしとて。何國
 ともねく兩個の逐電をとりとび。跡に跡とまゝ余左衛門大に
 欄を蹴踏して致さるゝりどもせんともなゝ。そさん何屋
 大にもは食まゝといへるを去らんに隣のおども、兩個は
 所にお宿まゝくたもひて数日供方代たつねもとむまどと
 ころよ去向をまどる由へ皆く牙代遣て日代送りぬ。余左衛門
 老宿ふおよんでお後成ふやせしより病息かこるまられとも
 合家一個の人おあらどとび。催うの看病ものりうさるゝしと

余を誘へておひひよねどろき並よ渡の街方とて義父の
 密件とくわへばけ時老ま余左衛門の婦お熱はとまゝしり
 おらもまゝお後りりまお余を誘ひ深海女傳助が密通なせる
 する。うへに始りうりあるといへども。かゝりうの悪をあらんとお思ひ
 かけずとて。おらくお裏に憤りおまふくも。何國よ逐かくう
 とも天細おもる事あるまゝ。やがて自業自得とあ個が女よ
 悪報来らんとして。三長兩短はももののがうりお時刻を移経に。
 何ととんを和める。昔おかえらとまお余左衛門のいし
 余も情が苦心を救ふ秋林まゝ。かくまがねまひ正し。一處
 連るる人の為余まゝさるる。成只顧せし。ふたたびおと



賣由
 〇十



おん平

あつ子



おん平
舟
あつ子

おん平

龍
湖
良
卷
之
五

〇
十

奥さんとのいづれも余を奉つハ病者甲にちりて
 山崎の室ち小日集一揚谷の教世者に
 看病の所時のも病家とまがかりづきりまとも
 かなしさいと人々なく其の父とまふかりいふま
 めつざらぬあらざまば此輩の輩とまをく
 ありけり郊外の三昧小新なる石碑を造ら
 来て在がむと考出の文と子紙とそ一が
 の々士竹葉うもの京東家富て孺者のを状

遊引一彼吾妻路一門は整名あり成中
 ありて彼が勢と小少也もつぱら黄金の
 賢はひをえをまども吾妻の歴のまは
 るとぞ是未余を清く志体と志らざる
 彼一身分擲しうりは佳くまといへ
 交遊の大そ吾妻路が妓家は若て後
 妻路の指授を一家の標書おし
 嵐星の装ふぐむく代の妓とる舎
 折しそまの目注に橋の客人が誘
 者あり一むへとま屋敷の時未ま

かたらひて扱川の辺に待伏させ。かの吾妻路が竹鹿を奪ひさら
 ば、救の黄金をあたえんと約し、金ぬ脱し其日かまをばりて、
 雞のありをともあまきりて、墨に橋より竹鹿をほくせ、吾妻路
 居六頭子附あつて行かどねどある竹鹿の蔭よりむらりくと
 三人の悪黨あらはれ出まらば、吾妻路が素もる竹鹿の着の向御と
 三たつふちをばらんとそまき倒し、隙に二人の悪黨は竹鹿
 を奪ひてうけ出す。或やらしと交へる花魁の老いもとま
 かい、いさるまきば、残る一人の怪者よ、たぬくよ、あつるま、目
 大に怪あさうらちと。西島こして引うへせ、忘八の内
 大と、強を互して、何方上人、狐をらせて、花魁が、引、あつる

もしりり

〇十四 田あやうれもの

あつる竹鹿の陣平といへる者あり。西島二年久しくそと
 まげの情の文はういなり。まゝに送りむらひの竹鹿界の
 竹鹿の陣平と名びて、まじりて、男あつる。客人の作ごとと
 よりて、浪花の陣平下りて、用個へかへる。さしに、橋の蔭
 川の船後を、誠と通と急ぐふ、向より息をひきて、馳まらば、
 興成、足まき、銭廊にて、用みきたる、野るまきども、異る男、あつる
 中も、て、後ひこまき、後とも知らぬど、竹とやらんあやう
 たり、よ、竹の裏より、吾妻路、目とやくも、又とめて、まゝなり

はんどのふいふいさざやけりもかくぞむら終いもとすよ
 はふ大さふ騒るそとくすりぬき書とありひけるに全
 行へつ連行ぞとつよよまこやく捧鼻とつて北よへ
 もべ人の破産子ものともいへず後付成右と左へ振か
 まと名付とねら伏て花魁を小いけほよもとまへ
 小龍の惚とまぬりきて歩もたまぬ通芝のあふと日け
 とぼぬる裾をあげかいへてなだぐくして終ほどよとや月も
 尋て人里へ道ふ犬のあまへ文月もとつぬ青宮に狐火
 ておそろしくいつつに踏まよひ田のくらにをく
 中

まろびとらる三昧にさしつろりぐきひ強うとるま
 としさをが女のかよいくも石はほまづと倒と伏し。そのま
 息ハ終ふなり。月下老人の赤縁と幸う縁よや賣油郎の
 余を傍にけらん義父の忌日に苗まども朝まぶささうり
 いたるを家事小せはしく。漸くは墳墓とらひ浄んと
 三昧にぬさす屋の傍に事ある子弱女の心事をうらな
 たりと居るとえとめ系来仁ある本性なまはいたい
 ひて囊中より紫紙を出し携し壺を桶のあを手に抱いて
 はにふくませ旅し探める海とも見えねどもまはは
 ふもあらねば名残承んるもまへがとくさまぐく
 抱

と進もども今日なん義父の忌日にして。三昧ふいたるよしと若て
 まか敷もいとく交ざるうちよ。然うつりたまへ明日かかゝらざる
 ままで来るべし。約するやへ吾妻路も傳平し余も傍のつづき
 小くあとのみか。髪まで別を去ぬ却後今日破落の首領
 狐いっねるものころたひに。先は池屋の藝ま傳助なりかとも
 たる全根難具衣敷に。なるまで。多く清おとらま。文のおさざら
 るさよりに。鳴る悪る。加徳さしつまども。天細のぞき。流に難
 小とらま。主家の旧悪まで。あけして。陰隊女も。こも。と。ま。罪に
 初さのきたる。この後日の事。うそ。に。ま。る。今日西廬の發効。一う。こ。なら
 ぐる。如へ。撃の。は。平。出。標。吾。妻。路。と。は。な。ひ。て。か。つ。り。ま。は。死。た。る

ちの。再ひ。活。命。た。る。ど。く。匠。つ。笑。つ。う。ま。し。と。へ。何。お。た。と。へ。ん。方
 し。な。し。と。て。聖。日。に。な。ま。と。ハ。余。を。傍。に。惣。食。意。持。い。ん。と。角。橋。の。奈。を
 お。け。う。と。な。ら。ず。吾。妻。路。も。と。く。う。り。と。才。と。新。ひ。ひ。て。ま。つ。徑。に
 余。も。傍。も。ま。く。入。者。と。わ。教。妓。の。い。唄。い。せ。奈。妓。の。い。音。せ。酒。席
 小。して。音。ま。へ。余。を。傍。が。て。成。執。て。你。国。お。法。を。い。け。け。始。多
 互。心。の。を。若。解。放。して。春。狂。密。を。ま。び。て。吾。妻。路。ハ。私。言。に
 い。ひ。る。や。う。御。身。よ。ね。が。ひ。あ。と。ども。只。後。集。う。け。と。あ。れ。ば
 余。も。傍。り。石。龜。の。月。宮。よ。登。り。て。遊。仙。の。美。と。な。す。生。涯。の。至
 久。ぬ。る。ハ。是。君。が。疵。と。な。ま。い。け。と。よ。も。利。ひ。た。ま。入。所。あ。ら。は。あ。れ
 入。大。入。る。も。い。文。又。律。せ。ざ。ら。し。と。若。る。吾。妻。が。う。我。郎。に

跡て下守公の奴心せんと欲要む伴一終はんや存余を
 笑ふてし人。麻の如く牡丹花植るよきしく。事さらふ角せす。
 のうへ茶が業ひ穿く本終るまば。君が一板の價にござ一年
 余の芳奴様ぬまして終ふと價う入こと。百千年成歴とし猶
 かたしとり人吾妻よそのりまらばかを考へたす入。我いたぐ
 高がとら。求めて貴族と選ハす。とやうに妻とゆと般と
 称さんす。と伴一終る。一條の信ある。芳年。嵐山の梅様。
 内さには。芳まよとん。一兼。荏野。又て。えうけたまひ。終らん。
 そ。防の大。室街の梅郷といふ。彼客人の華治。よ守へ
 たる。大。成。至。よ。して。君。冠。より。不。く。風。月。な。し。名。あ。ら。ぬ。と。教。と

續身して。芳。莊。よ。移。し。壺。せ。ら。ま。し。其。莊。堅。固。の。人。し。て
 考。ら。法。法。を。ぬ。ま。ま。ひ。そ。ま。し。し。終。身。の。生。調。と。あ。た。へ。て
 親。置。よ。回。し。或。ハ。自。ら。嫁。し。て。化。よ。端。ら。せ。又。よ。そ。の。意。を。成
 ぶ。ら。ボ。只。一。時。の。逸。樂。と。そ。の。こ。ふ。し。て。今。其。年。終。耳。願。よ
 ぶ。て。雲。雨。ハ。あ。ら。ね。ど。も。平。日。小。春。橋。よ。あ。そ。び。て。あ。ま。く。の。遊
 妓。市。間。成。あ。つ。つ。て。酒。の。社。中。と。し。て。振。い。し。る。や。ぬ。く。身。ハ
 い。つ。も。い。つ。も。小。ほ。ら。る。ま。り。び。大。き。な。よ。と。ら。い。と。續。身。し。て。時。即
 あ。ら。ば。配。偶。せ。ん。と。の。た。ま。へ。ど。も。あ。性。と。い。ふ。極。へ。い。客。の。中。に。あ。る。こ
 人。の。中。よ。入。ま。さ。る。り。成。ん。と。し。公。界。十。年。の。花。み。ぬ。ば。原。屋。よ。う。え
 ぬ。む。と。び。て。危。道。と。なる。へ。き。君。と。り。ま。ば。只。梅。郷。の。大。き。が

俗務らうらざる風顔成志よひて。く勤めく廢さめて。地よ王
 冠成着まじ情郎のむ。く親しく父と叫び嘆と老く
 可へふ。ことび良人成情で。後女の約成さしけり。縁由成告げ
 まいらせまじ。身を續かしたまはるべし。きて余を捕つたこと
 ひ花街の門は出るとも。恒々大層に住まきて。後縁成まじひ。
 耳とふあをたまふ。女ともて糸のあひ交りて。扱扱悪食
 小だもあくる。ゆさし。いひや。一日十日の定を若ふも。経志のひた
 まいり。とて。いやとよた。よら。ず。ら。は。が。ぬ。いた。よ。叶。い。さ。ば。燈
 成まじひ。突ふ。曹標を飯と換るとも。更には。いと。ハド。と。固。く。り
 後良の商量成定むら。か。る。取。へ。梅。口。大。層。に。角。搦。の。主人。に

命て忘八に續身の事成斗。まじ。い。花。ら。う。ね。る。洞。争。り。院
 小吾妻路ハ挑花の縁。そ。て。後。女。の。配。偶。定。ま。り。り。と。い。は。い。や
 花街と出る。と。て

年月のうら。い。も。こと。う。す。く。り。の。多。彩。に。ぬ。き。被。つ。ね
 已。海。で。一。自。身。の。経。冊。ハ。今。も。折。西。島。よ。花。草。入。の。あ。る。よ。し
 ぞ。り。り。扱。扱。大。層。に。余。を。捕。ま。よ。ま。は。法。法。法。法。ハ。角。搦。に。は
 び。い。て。名。彩。の。酒。成。性。せ。り。り。彩。分。の。強。り。もの。ハ。岳。の。む。山。の。む。く
 家。代。来。ず。の。社。説。り。り。か。く。て。後。吉。日。成。あ。り。て。梅。搦。大。層。に。あ。づ
 肉。を。ふ。ふ。ふ。ふ。と。り。角。搦。の。主人。と。嫁。と。一。余。を。捕。が。方。へ。嫁。て。よ
 年。く。月。く。家。富。さ。う。え。一。男。一。女。を。後。て。子。孫。承。く。侍。へ。い。は。い。ま。よ

能く味を知る子として 標院の賢法にもりて 人の世の富貴は 世の移りよるるを正し余を誘志傑の形状と天賦無ありては 夫を新婦に授けそすつるべし

賣油郎五巻

ナコ

凡士農工商とも夫々の職分家業に依りて持用の品物
 今日を嘗て世上一般之然る事近世写本乃巻の中
 狎り白角巾の巻ハ種々の書入又ハ形々ハ覺束なき本偶ハ
 或ハ見苦き男女の淫奔かど画き君臣父子の中ハ了
 面を赤め合言又間々多ク一見し等ハ必竟一時の興ハ棄
 ての戯まきからん併其職分の道具ハ疵身ハ小儂る人
 著速拙く筆者の熟り有らば口言詰を以て其過ちを
 咎め書中への戯画樂書ハ許し給へ諷諭多ク氏常ハ
 是れを歎き世ハ深ク曰て主代りて諸君子に傳ふる事

武陽

正保述

六

